

新句構造文法 S O O T h 理解の指針

田 原 薫

0. はじめに

本号で論文として新句構造文法 S O O T h 2 による「that-痕跡効果」や「too ... to-構文」の分析を扱ったが、以前から随時 S O O T h 2 およびその応用についてはアピールしてきたものの、まだ充分おなじみでない方もおられると思うので、本号の拙論を理解して頂くためにも、そのシステムの基本的思想を解説しておくことにする。また、このシステムは当然チョムスキーの Minimalist Program や Categories and Transformations 理論と衝突するものなので、S O O T h 2 を主張することはそれらのチョムスキーの立場を批判することにならざるを得ないのであるが、最近ではチョムスキーは言語学者としてよりむしろ国際政治評論家として発言・行動することが多く、そちらの面で有名になっているので、そちらの面での日本(人)に対する影響を考えると、日本の国益と日本人の名誉にとって彼は好ましからざる人物になっている。これに関連しては月刊誌『諸君!』昨年10月号の古森義久「米国じゃ“あっち向いてフン”-何故か」の併読をお勧めする。

1. S O O T h 2 の沿革

構成成分から bottom-up 式に文を構築していく文法観において、主語候補(を含む構造)を早く導入し、ついで動詞と、もしあればその目的語(候補)を導入するという順序づけの構想ないし提案は、かれこれ一昔前に遡ることができる。たとえば1993年『ニダバ 第22号』に「英語/日・仏語型の使役構文と動詞句内屈折図式 — 可変範疇・態選択機構・接合刻印の概念」を発表したが、この動詞句内屈折図式(IP-within-VP Schema)が、主語候補が動詞をc統御せずむしろ動詞にc統御されているという点で、S O O T h の先駆者にあたる。当時のチョムスキー理論に対する逆転の発想である。

ついで1995年『Kansai Linguistic Society 15』において‘Specifier-Original-Object Theory’「目的語指定辞起源説」を提出し、S O O T h の略称を与えた。これは名のように他動詞の目的語をVPレベルの指定辞と見なす説であるが、対照的に主語候補はVの補語と見なしていた。確かに動詞を述部の主辞とする文では、この図式はかなり高い説明力を発揮したが、形容詞を述部の主辞とする文には対応できなかった。また、文には

‘I am in the room.’のように前置詞 in を主辞にもつと見なした方が適切と思われる文もあり、もっと一般的な主語候補の地位を確立する必要に迫られていた。

そこで1996年以降、次第に構想が固まり、発表の対象にもなった句構造文法思想がSOOTH2であり、これは‘Subject-Occurs-Originally Theory’「主語初頭生起説」の略称であるとした。これは、ごく一般的な未詳定の述語Øを仮定し、無標的な主語候補をその指定辞に位置づけ、そうしてできたØPを動詞なり形容詞なり前置詞の補語（私流の、構築文法としての用語では「株語」‘Subject’）とする構想である。

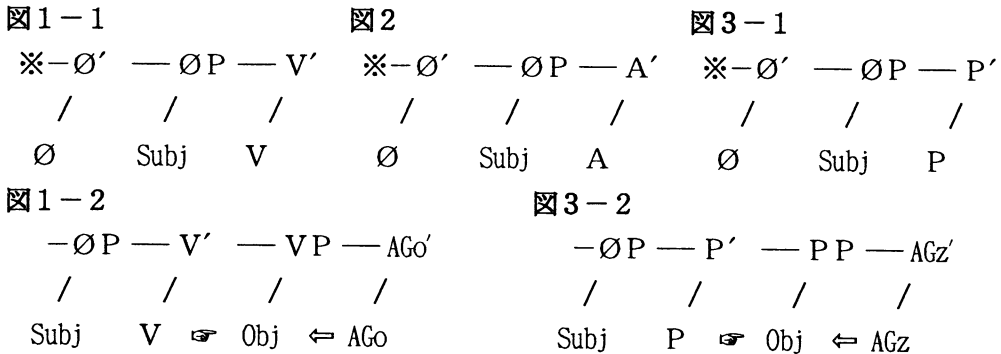


図1-1、図2、図3-1はそれぞれ動詞、形容詞、前置詞を主辞とする節文の構築過程の最初の段階を示すものである。※は環境設定句或いは文脈設定句を収容する場所であり、Subjは無標的な主語候補が生起する位置である。図1-2および図3-2は、たとえば‘I love you.’‘I am in the room.’のような他動詞主辞節文・前置詞主辞節文において、動詞／前置詞の「目的語」you/ the roomなどが生起する地位をObjとして表わしている。その上にかかる無音の述語AGo/AGzは、それらの目的語がそれにふさわしいθ役割をもっているかどうか、チェックする形容詞的要素で、Objの格（対格／斜格）の認可に必要な成分と仮定する。つまり格付与は前後からの**挟み統率**（⇄⇄）による、のである。

このように決めると、まずSubjが発生現場でいかなる格ももつことができないことは、Ø述語が格に関係しない要素であるから当然であるが、もし図1-2と図3-2がVPやPPの段階で構築が打ち切れ、上にAGo/AGzが掛からなければ、動詞／前置詞の目的語といえども**挟み統率**による格認可が得られず、従って無音に留まらざるを得ない。この機構をうまく利用したのが、本号の拙論の‘too…to-’構文の分析である。因みに、Subjが音形をもつ主格主語に昇進できるのはAGs'以上の構築段階であって、TP段階までは（たとえその指定辞の地位に昇進しても）格と音形をもてないことにも留意されたい。

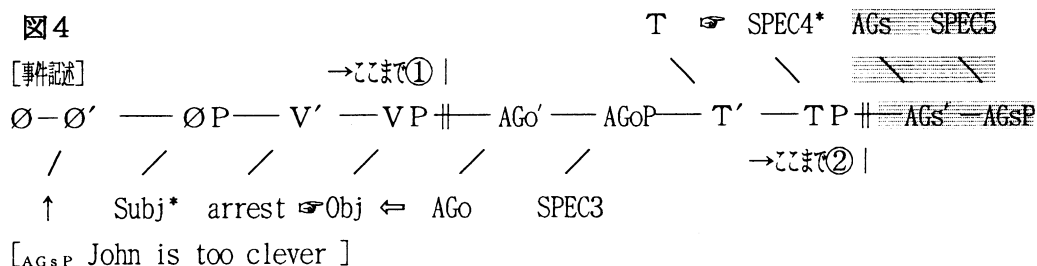
2. 参加合流型の影響行使と重要なv統御の概念

チョムスキーの図式ではc統御(c-command)の概念が重要な役を演じた。c統御というのは、統語構築物AとBが併合（結合）して新しい統語構築物ができる場合、たとえばA

は結合相手B全体およびその部分集合に対して何らかの影響を及ぼすと見て、「AはBおよびその部分をc統御する」と言うのであるが、これはtop-down式の分析文法でならともかく、bottom-up式の構築文法では、新たにc統御する者は今まで登場して来た構成素とは別の新参成分であるから、説明力が低い。いわば原住民とは別の外来の（白人の）旦那が植民地総督として就任・君臨？という感じであり、白人であるチョムスキーが考えることはこの程度のものでしかないのであろう。しかし、各構成成分がそれぞれの能力に応じて全体を構築するのに貢献する、といった構成素民主主義のような思想に立てば、合流型というか、古参成分が新参成分に対して影響を及ぼす、というv統御‘veteran command’の方が、遙かに重要な概念である、と（直感的に）言えよう。

以上のことを次のように、河川の放射能汚染になぞらえて考えてみよう。多くの支流が合流して大河になっている水系を想像し、或る一つの支流A川がたとえばウラン鉱山から発しているとして、その水が放射能で汚染されているとする。A川がB川と合流すればB川そのものは汚染されないが、合流点以後のB川起源の水はやはり放射能で汚染されるであろう。そのようにして川が次々に合流すれば、薄まりつつも放射能は川の水全体に広がり、最後には大河全体が汚染される。このことを統語構築の比喩と見なせば、ただ1個の構成語彙から供給された放射能のような効果は、薄まりつつも決して消滅せず、たとえば節文なり談話なりの全体に影響を及ぼすものである。つまりこれは、A川が幾多の合流点以降の他の支流起源の水を「v統御した」ことになる。これに対してc統御では、A川が合流点より上流の他の支流を「汚染する」？ことになり、理屈に合わない。

以上の比喩のようにv統御の重要性は明らかであるが、この思想が何に役立つかといえ、たとえば拙論の「句構造観の革命 — 時制節が副節で、不定詞節が主節」という分析に役立っている。そこでは①John is too clever to arrest. ②John is too clever to arrest a wrong person. において前半が副節、to以降が主節と分析したが、…



確かにチョムスキー派の常識からは逸脱しているが、①ではVP、②ではTPである意味的主節は自前の陳述力こそ欠くものの、∅'の段階でそこに副節[AGsP John is …]が流入しており、主格語・時制・一致といった陳述力に必要な要素はそこから供給されるので、主節の構築がVP或いはTPで打ち切られても、全体的な陳述力は充分具えていると見なすことができる。このような解釈は合流影響寄与型の句構造観の長所であろう。